



The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 48 号

(2015 年 12 月 24 日)

発行所：〒464-8601 名古屋市千種区不老町
 名古屋大学教育発達科学研究科 心理社会行動科学講座
 高井次郎研究室
 日本グループ・ダイナミクス学会
 E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp
 発行人：高井次郎 編集担当：植村善太郎

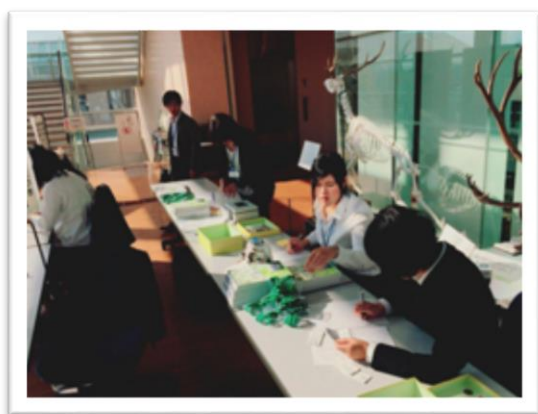
【 目 次 】

§日本グループ・ダイナミクス学会第 62 回大会後記	2
◆ 大会準備委員長から：西道 実	
§第 62 回大会参加記	3
◆ 法 弁	
§2014 年度優秀論文賞	4
◆ 選考経過と結果の報告：今川民雄	
◆ 受賞者の声：野波 寛	
§2015 年度優秀学会発表賞	6
◆ 選考経過と結果の報告：有倉巳幸	
◆ 受賞者の声：杉山高志／秋保亮太／田中大貴／土屋耕治	
§三隅賞	12
◆ 選考経過と結果の報告：中島健一郎	
§国際学会大会参加記	12
◆ 伊藤建彦／正木郁太郎	
§追悼文	14
◆ 廣田君美先生：西田公昭	
§事務局からのお知らせ	16
◆ 研究の国際化支援制度（英文校閲補助）について	
◆ 実験社会心理学研究 掲載予定論文	
◆ 次年度大会について	
§グルダイ学会関係連絡先	17

★★★ 日本グループ・ダイナミックス学会第 62 回大会後記 ★★★

大会準備委員長 西道 実（奈良大学）

平成 27 年 10 月 10 日・11 日に奈良大学で開催いたしました第 62 回大会は、多くの皆さまにお越しいただき、盛会のうちに終えることができました。ご参加くださいました皆さま、ご協賛をいただきました各社・ご団体、ご協力をいただきましたすべての皆さまに深く感謝申し上げます。



今大会の開催に際して、準備委員会で重視したことは、会場とプログラムをシンプルな構成にすることでした。具体的には、会場の配置をできる限り集約して動線をわかりやすくすること、大会主催の講演とシンポジウムの企画をせず、平行セッションを極力減らすことでした。このことについては、前号に掲載していただいた「大会へのお誘い」で、「ゆったりコンパクト」や「黒子役」などと表現しながらご説明いたしました。実際のところはいかがでしたか。

でしょうか。こればかりは、ご参加くださいました皆さまの評価を待つしかないのですが、スタッフ一同、合格点はもらえるのではないかと期待しております。

ただし、反省点はいくつもあります。まずなによりの反省点は、開催直前に一部会員へのプログラムと論文集の不達が判明したことです。準備委員会としては全くの想定外でしたので、確認や対応に手間取り、大変ご不便をおかけいたしました。配送業者に問題の一端はありますが、十分な送付期間を織り込まなかった責任はわれわれ準備委員会にあります。本当に申し訳ございませんでした。再発のないように、きちんと次年度に申し送りしたいと思います。

また、これは今頃になって気がついたのですが、大会の記録をきちんと残していませんでした。記録らしいものといえば受付時の控えとお弁当の数くらいで、時間毎の来場者数や各セッションでの人数など、2 日間の動きを記録として残しておけばよかったと後悔しています。当然、公式の記録写真などは一枚もありません。仕方がないので、この会報用には、スタッフの学生にお願いして、個人的に撮ったものを LINE で送ってもらいました。毎度のことながら、詰めの甘さを反省しています。

他方、うれしい誤算もありました。初日は付属幼稚園の運動会と重なり保護者の車が学内を埋め、隣接するグラウンドでは元気いっぱいの声や鳴り物、保護者の声援などが響きわたるはずでしたが、聞き及んでいたよりは、遙かに駐車行動が統率され、鳴り物や声援なども気になるレベルではありませんでした。会場内では気づかない方もいらしたと思います。また、ちょっとした余興のつもりでお願いした狂言サークルの舞台でしたが、いい勉強になるからと彼らが真摯に取り組んでくれました。短い時間でしたが、多くの方楽しんでいただけたようで、懇親会を和やかにスタートさせることができました。

現在、大会をサポートしてくれた学生達は、修士論文や卒論・レポートなどに追われています。準備委員を担って下さった先生方もなにかとお忙しいようです。事務局では、村上先生を中心に会計報告の作成を行っています。お弁当やビールを発注しすぎたり、丁寧に検討したはずの臨時バスの乗車率が低かったりして、出費のかさむところはありましたが、さまざまなものを節約しましたので、収支は何とかトントンに収まりそうです。



★★★ 第 62 回大会参加記 ★★★

法 弁（大阪大学人間科学研究科）



2015 年 10 月 11 日から 12 日にかけて開催されたグルダイ学会第 62 回大会に参加しました。

今回の大会は私にとって特別な意味を持っていました。なぜならば、これは私が日本の大学院に入って二年目にして、初めて参加する学会であったためです。初めて参加するだけではなく学会でポスター発表にも挑戦しました。釘原直樹先生や研究室の先輩たちのご指導の元で、ポスターの作成や、発表の準備に精一杯頑張りました。新鮮な気持ちと緊張感にあふれた 2 日間でした。

今回発表したのは、恐怖管理理論に基づく利他行動の促進要因を、寄付課題を用いて検討した研究結果についてです。結果としては、日本において、死の脅威が高まることによって寄付行動が促進されたという内容でした。さらに、性差について探索的に分析を行った結果、死の脅威が高まると、男性参加者において次世代への寄付が現世代への寄付より促進された一方、女性参加者においては逆に現世代への寄付がより促進されたということが見られました。これらの結果について、たくさんの先生方から、性差が現れた理由は何か、寄付額の分布は死の顕現性操作によってどのように変化したか、寄付課題の選択は環境保護よりも文化に関わる内容に変更したほうがよいのではないか、といったご意見・ご質問をいただき、非常に参考になりました。私がおどおどしてうまく説明できない時も待って下さり、話を聞いてくださる先生方への感謝の気持ちでいっぱいです。ポスター発表の 1 時間半はあっという間に過ぎました。これからの研究方向についてのインスパイアをいただくことができ、「ポスター発表をして本当によかった！」と心の底から思いました。

1 日目の懇親会では、今回の大会を主催する奈良大学の学生の皆さんが、日本伝統芸能で

ある狂言を披露してくださいました。留学生である私にとって、学会で日本の伝統文化まで堪能できることは、すごく嬉しいことでした。

また、2日間にわたって災害や態度などのテーマについて、たくさんの発表を興味深く拝聴し、とても勉強になりました。さらに、大会を機に先生方だけではなく、多くの若手研究者との交流もできて、私にとって非常に貴重な経験となりました。

今回のグルダイ大会は私にとって初めての参加だったにも関わらず、最高の学会でした。先生方や同世代の研究者から発表やお話を聞いて、自分の研究はまだまだ未熟なものだなあとすごく感じましたが、皆様に負けなよう努力しようと決心をしました。次回の大会で口頭発表をすることを目標にして、これからいろいろ頑張っていきたいと思います。

最後に、大会の運営にご尽力いただいた準備委員会の先生方、スタッフの皆様に心から感謝を申し上げます。

★★★ 2014 年度優秀論文賞 ★★★

【 選考経過と結果の報告 】

機関誌編集担当常任理事 今川民雄（北星学園大学）

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第54巻1号及び2号に掲載された原著論文6本・資料論文3本・展望論文1本の、計10編でした。8月11日に編集委員全員に選考依頼を行い、優秀と考えられる論文3編を選び、1位から3位まで順位をつけて、9月21日を締め切りとして投票をお願いしました。

論文の著者となっている委員の方を除き、17名の編集委員から投票が届き、規程に従って、1位票に3点、2位票に2点、3位票に1点を与えて集計しました。その結果を参考資料として、10月10日に優秀論文賞選考委員会を開催して協議した結果、下記の論文に、本学会の優秀論文賞を叙することに決定いたしました。

野波寛先生・土屋博樹先生・桜井国俊先生

NIMBYとしての在日米軍基地をめぐる多様なアクターの正当性：公共政策の決定権に対する当事者・非当事者による承認過程
(第54巻 第1号 pp.40-54.)

大会の総会において、この結果を報告し、授賞式を行いました。受賞された先生方の研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

【 受賞者の声 】

野波 寛・土屋博樹・桜井国俊
NIMBY としての在日米軍基地をめぐる多様なアクターの正当性
： 公共政策の決定権に対する当事者・非当事者による承認過程
(第 54 巻第 1 号 pp.40-54.)

❁ 野波 寛（関西学院大学）

土屋博樹（琉球大学）

桜井国俊（沖縄大学）



この度、由緒あるグループ・ダイナミックス学会の優秀論文賞を賜り、大変光栄に思います。本論文執筆にあたってご助言いただいた調査対象地の沖縄県の方々、貴重なコメントをくださった査読者の皆様、ならびに本論文を推薦してくださった選考委員の先生方に深く感謝申し上げます。

本論文は、私のゼミ生であった鷹尾浩平氏が2010年に提出した卒論のデータを再分析したものです。当時、卒論の締め切りが迫る中でどうしてもテーマが見つからず、「このままじゃ卒論が書けません、先生、なんでもいいからテーマをください！」と切羽詰った顔で訴える鷹尾氏に、「それじゃ私の研究テーマでやってみますか？ 沖縄で調査をやってもらうから大変だよ、それでもいいかな？」と研究課題を設定したところ、はりきってデータ収集にとびまわり、意気揚々と卒論を提出してくれました。論文として投稿するにあたり、鷹尾氏も連名とすることを問い合わせたのですが、本論文が在日米軍基地の問題を題材としていた関係から、就職まもない鷹尾氏は残念ながら連名を辞退された経緯があります。学術論文としての中立性は堅持していても、やはり「世間的」に、この問題が持つセンシティブな面を痛感したものでした。

社会的決定を行う権利の正当性というテーマで研究を開始して、気がつけば8年ほどになり、調査フィールドは沖縄県の赤土流出問題から内モンゴル自治区の牧草地の管理問題へ、そして今回は迷惑施設の是非を焦点とした米軍基地問題に手を出しました。質的・量的調査のほかにシミュレーション・ゲーミングの開発、仮想場面法の実験まで、研究手法もいつの間にかあれこれ広がっています。そもそも正当性（レジティマシー）は、急速なグローバリゼーションの過程でコモンズを誰がいかに管理すべきかが問われ、環境社会学の中で研究が積み重ねられていた概念でした。ただ社会心理学の領域では埋もれかけていたテーマであったようで、先行研究も細々と歴史はあるものの、山ほど数があるわけではない。ところが埃をはらって掘り起こしてみればいや相なシロモノで、NIMBY問題のようなきわめて現代的な課題にまで適用でき、ゲーミングを作れば実はこれもとある受賞の栄誉をいただき、実験による検証も興味深いという、なにやら大鉱脈を掘り当てたような。

社会的決定を行う権利の正当性というテーマで研究を開始して、気がつけば8年ほどになり、調査フィールドは沖縄県の赤土流出問題から内モンゴル自治区の牧草地の管理問題へ、そして今回は迷惑施設の是非を焦点とした米軍基地問題に手を出しました。質的・量的調査のほかにシミュレーション・ゲーミングの開発、仮想場面法の実験まで、研究手法もいつの間にかあれこれ広がっています。そもそも正当性（レジティマシー）は、急速なグローバリゼーションの過程でコモンズを誰がいかに管理すべきかが問われ、環境社会学の中で研究が積み重ねられていた概念でした。ただ社会心理学の領域では埋もれかけていたテーマであったようで、先行研究も細々と歴史はあるものの、山ほど数があるわけではない。ところが埃をはらって掘り起こしてみればいや相なシロモノで、NIMBY問題のようなきわめて現代的な課題にまで適用でき、ゲーミングを作れば実はこれもとある受賞の栄誉をいただき、実験による検証も興味深いという、なにやら大鉱脈を掘り当てたような。

私は以前、Moscoviciの古典的研究で名高いマイノリティ・インフルエンスの研究を進め

ていたことがあります。現在この研究は世界でもかなり退潮してしまっていて、すでに私が実験を行っていた当時から、日本でこれを行っているのはほとんど私だけ、マイノリティを研究している自分がマイノリティ、という状況でした。正当性というテーマも、スタート地点はどうもメインストリームから外れたところだったようですが、今回は研究をともに進める頼もしい共同研究者の方々が国内外にあり、研究も人脈も少しずつ広がりつつあることを感じています。今回の受賞は、そうした方々への心強い追い風ともなるでしょう。先述のようにセンシティブな題材にまで手を出したにもかかわらず、ここまで研究を支えてくださった共同研究者の皆様に、心より感謝する次第です。本当にありがとうございました、そして今後もよろしくお願いします。（執筆：野波 寛）

★★★ 2015 年度優秀学会発表賞 ★★★

【 選考経過と結果の報告 】

選考委員長 有倉巳幸（鹿児島大学）

2015 年 10 月 11 日から 12 日にかけて奈良大学で開催された日本グループ・ダイナミクス学会第 62 回大会において、「2015 年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。本賞は、規程により「第 1 著者である発表者が、発表時点において大学院在学中の者、または大学院修了後（退学後）5 年以内」の会員の研究を奨励する目的で設けられた賞です。

以下に、今回の選考経過の概略ならびに選考結果をご報告いたします。

1. エントリーの受付

エントリー受付は、大会発表申し込みの際になされました。エントリー総数は 31 件でした。受賞資格にあるかどうかを検討したうえで全て第 1 次審査の対象としました。

2. 第 1 次審査

第 1 次審査は、常任理事及び理事により構成された 19 名の選考委員の投票により行われました。各選考委員は、8 月下旬から 9 月中旬にかけて、エントリーされた発表の論文集原稿を読み、各部門において授賞に相応しいと思われる発表 3 本以内（「該当なし」も含む）を選び、投票しました。なお、今回は、ロング・スピーチ及び English Session のエントリーがそれぞれ 1 件と 3 件でしたので、規定により第 1 次審査を行いませんでした。

集計の結果、ショート・スピーチとポスター部門のそれぞれにおいて得票数の多かった上位 3 件ずつが選出され、全部門のエントリー合わせて計 10 件が、当日の第 2 次審査に進みました。

3. 第 2 次審査

第 2 次審査は、第 1 次審査を通過した 10 件に対して、大会期間中に行われました。1 つの発表に対して 3 名の選考委員が、「発表内容」と「プレゼンテーション」のそれぞれを 5

段階で評価しました。

4. 授賞対象発表の決定

最終集計は、第1次審査と第2次審査の結果を合わせて行いました。その結果、部門ごとに最高点を獲得した以下の発表における第1著者の方々が、発表賞を授与されることに決定しました（以下、敬称略）。

<ロング・スピーチ部門>

- ・ 第一発表者：杉山高志（京都大学）
- ・ 発表題目：「Days-Before」の語りの質的・量的分析 阪神・淡路大震災の被災体験の語り為例に
- ・ 共同発表者：矢守克也

<ショート・スピーチ部門>

- ・ 第一発表者：秋保亮太（九州大学）
- ・ 発表題目：チームで振り返ることにより促進される暗黙の協調 ―協調迷路課題を用いた実験的検討―
- ・ 共同発表者：縄田健悟，池田浩，山口裕幸

<English Session 部門>

- ・ 第一発表者：Hiroki Tanaka(Kobe University) <田中大貴（神戸大学）>
- ・ 発表題目：Signaling Benign Intention in Indirect Reciprocity: How Can Punishers Manage Their Own Impression?
- ・ 共同発表者：Yohsuke Ohtsubo <大坪庸介>

<ポスター発表部門>

- ・ 第一発表者：土屋耕治（南山大学）
- ・ 発表題目：社会的感受性と身体活動を伴う小集団の課題パフォーマンス ―ブロック積み上げ課題を用いた検討―
- ・ 共同発表者：原田知佳

受賞者は、学会会長より賞状を授与されました。また、受賞した発表に関する論文を第1著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を付与されました。この権利により、「特集論文」に準じて、主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は、学会の広報（速報）メールマガジンである「グルダイメールマガジン(JGDA_Flash)」における受賞発表日（2015年11月9日）から1年間に限って有効です。優先投稿を希望する受賞者は、その旨を明記の上、2016年11月8日までに編集事務局へ原稿をお送りください。

【 受賞者の声 】

<ロング・スピーチ部門>

杉山高志・矢守克也

「Days-Before」の語りの質的・量的分析
阪神・淡路大震災の被災体験の語りを例に

❁ 杉山高志（京都大学情報学研究科）
矢守克也（京都大学防災研究科）



この度は、優秀学会発表賞という名誉ある賞をいただき、誠に光栄に思います。審査してくださった先生方、発表時に質問してくださったご来場の方に厚く御礼申し上げます。そして、本研究を発表するにあたり、親身にご指導くださった矢守克也先生、ゼミにて刺激的な議論を交わしてくださった研究室の皆様に感謝いたします。

本発表では、被災前の日常、すなわち「Days-Before」の視点から、阪神・淡路大震災でご家族を亡くした被災遺族の語りを聞き取り、質的な分析を行う研究と、神戸

新聞 NEXT のウェブ投稿記事『震災の前日』に対する質的かつ量的な分析を行う研究について検討いたしました。本研究では、被災前の経験談を「Days-Before」の語りと名付けています。現在、震災経験談の語りとして多くの手記が出版されていますが、その多くは震災直後から始まる語りです。震災を夢にも思わなかった穏やかな日々が震災前にあったはずなのにもかかわらず、震災の語りの中で震災前の生活、「Days-Before」の視点から経験談が話されることは少ない現状です。そこで、本研究では、阪神・淡路大震災でご家族を亡くした2名の被災遺族に対する「Days-Before」の視点での聞き取り活動、そして『震災の前日』の投稿記事に対する分析を通し「Days-Before」の語りの特徴を考察いたしました。

本研究は、「出会い」の連続でした。本研究でお世話になったご遺族の方はもちろんのことながら、彼らの語りの中で話される阪神・淡路大震災で亡くなった娘さん、息子さんの様々な姿に「出会う」ことができました。私は、彼らと語りの中でしか会うことはできませんが、生き生きとした彼ら表情は目に浮かぶようでした。震災による喪失という事実と隣りあわせの語りではあるものの、ご遺族の中に生き続ける娘さん、息子さんについてご遺族の方とインタビューの最中に何度笑い合ったか数えきれません。ご遺族の方とのインタビューを終えて、神戸から京都に帰る電車でご遺族の方から逆に元気をいただいたと感じたこともありました。今でも、ご遺族の方とは「被災者・研究者」という関係性を超えて、一人の人間として関わりを続けています。このような「出会い」を結びつけてくれた本研究に、私は心から感謝しています。

本賞を励みに、より一層精力的に研究活動に取り組んでいきたいと思っております。今後とも、皆様と議論をさせていただけますと幸いです。（執筆：杉山高志）

＜ショート・スピーチ部門＞

秋保亮太・縄田健悟・池田 浩・山口裕幸
チームで振り返ることにより促進される暗黙の協調
－協調迷路課題を用いた実験的検討－

- ⊗ 秋保亮太（九州大学）
縄田健悟（九州大学）
池田 浩（福岡大学）
山口裕幸（九州大学）



この度は、名誉ある賞を賜ることができて大変光栄に思います。何かと制限の多い研究内容ではありますが、このような評価を頂けて嬉しい限りです。お忙しい中選考に携わって下さった先生方、発表に対して貴重なご意見やご質問を下さった先生方、本当にありがとうございました。朝一のセッションにも関わらず会場が盛況で緊張しましたが、良い経験になったと同時に非常に楽しい時間を過ごすことができました。

本研究は、暗黙の協調と呼ばれるチームワークが実現していく過程を実験室実験で検討したものです。暗黙の協調とは、“阿吽の呼吸”と表現されるような、メンバーがコミュニケーションなしに互いの行動を推測し合って円滑な連携を取ることを指します。これまでの研究では、理論上での議論や示唆の提言ばかりが先行しており、実証的検討がほとんど行われていませんでした。そこで我々は、チーム学習によるメンバーの成熟に着目し、暗黙の協調を促進すると考えられる行動的側面（チームで行う振り返り）と心理的側面（メンタルモデルの共有）の双方を取り上げ、これら2つが暗黙の協調に及ぼす影響について時系列を追った検証を行いました。協調迷路課題を用いた実験の結果から、チームで振り返りを行うことによって徐々に暗黙の協調が実現されていく過程が実証されました。また、チームで振り返り（コミュニケーション）を行うことができないときこそ、メンタルモデルの共有が暗黙の協調の実現に効果を及ぼす可能性が示唆されました。

暗黙の協調に関してはまだまだ未解明な点が多く、やるべき課題が山積みです。加えて、今回のような実験室実験の結果が実際のチームにどこまで当てはめることが可能なのかは、追って検証をしていく必要があります。本研究は、効率的なチーム活動について考えていく上での理論構築の小さな一歩に過ぎません。今回の受賞を糧にするつもりで、今後の研究活動に励んでいきたいと思ひます。また皆様と議論させて頂ければ幸甚に存じます。

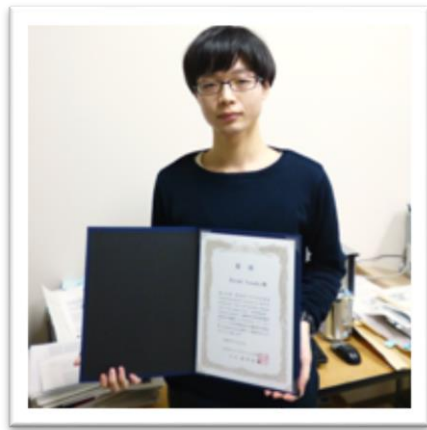
最後になりましたが、この場を借りて本研究を実施するにあたってお世話になった多くの方々に感謝申し上げます。いつも親身にご指導下さっている山口裕幸先生、私の意思を酌んだ上で先を見据えたアドバイスを下さる池田浩先生、冷静かつ的確なご指摘で私を鍛えて下さる縄田健悟さん、そして実験にご協力下さった参加者の皆様、本当にありがとうございました。（執筆：秋保亮太）

＜English Session 部門＞

Hiroki Tanaka ・ Yohsuke Ohtsubo

Signaling Benign Intention in Indirect Reciprocity:
How Can Punishers Manage Their Own Impression?

⊗ 田中大貴（神戸大学大学院人文学研究科・日本学術振興会）
大坪庸介（神戸大学大学院人文学研究科）



この度は優秀学会発表賞という名誉ある賞をいただき大変光栄に存じます。ご選考いただきました審査員の先生方に、心より御礼申し上げます。

本発表は、ヒトに特有の大規模な協力関係を成立させる仕組みについて、適応的アプローチから検討したものです。こうした協力関係が実現できているのは、血縁者や友人といった見知った相手だけでなく、直接的な見返りが期待できない他人にも協力する場合がヒトにはあるからなのですが、ではなぜこのような行動が可能なのでしょう。この問題を進

化的観点から説明したのが「間接互惠性」と呼ばれる原理です。これは、誰かに親切にすると他の人から親切にされ、親切にしないと親切にされないという、評判にもとづいた協力の連鎖モデルです。このモデルの精緻化は主に数理生物学の分野でされてきたのですが、まだここには問題が残されています。

というのも、このモデルが理論的に成り立つためには相手の行動（協力/非協力）に応じて「良い/悪い」という評判を付与しなければいけないのですが、これまで明らかにされたのは、その際、評判を付与する相手が協力/非協力した相手の評判も考慮しなければいけないということでした。しかし、実験室実験の結果から、このモデルは複雑すぎて人々の実際の行動には合致していないということが既にわかっています。

この理論と実証の齟齬を解消するため、本研究では新たに、意図シグナル戦略を考案しました。これは、協力しようとしたつもりがミスで協力し損ねたとき、あるいは悪い相手への協力を拒否した際に、その非協力が悪い意図によるものでないことを、その人自身がコストのかかったシグナルで伝達することができるというものです。これによって、従来考慮しなればいけなかった高次の評判情報がなくとも間接互惠性を成り立たせることができます。そして、本発表では意図シグナル戦略による大規模な協力の維持が可能であること、かつ実験において実際に人々がこの戦略を用いていることを報告しました。

従来の協力行動のモデル研究では、協力か非協力かという二種類の行動レパートリーしか扱われてきませんでした。しかし、ヒトの協力にはその行動の裏にある意図の要素が深く関わっています。本研究はこの観点から、従来のモデルに意図の伝達という要素を加え、ヒトの行動をよりよく記述できるようにしたという点で、大きな意義があると考えています。

研究の立案から計画、実験、そして本発表にいたるまで、研究室内外の方々から多くの貴

重な意見をいただきました。今回の受賞はまさしくそうしたご協力の賜だと実感しております。この場をお借りして深謝するとともに、今後とも一層精進して研究に励みたいと思います。(執筆：田中大貴)

＜ポスター部門＞

土屋耕治・原田知佳

社会的感受性と身体活動を伴う小集団の課題パフォーマンス
ーブロック積み上げ課題を用いた検討ー

⊗ 土屋耕治（南山大学人文学部）
原田知佳（名城大学人間学部）



このたびは、ポスター部門で優秀学会発表賞をいただくことができ、大変光栄に存じます。ご多忙中、ご選考頂きました先生方や関係された方々に感謝を申し上げます。発表をふり返りましても、やはり発表することでこそ得られる貴重なコメントを数多くいただきました。ありがとうございました。

本研究は、小集団の「力」とされる集団的知能 (collective intelligence) に着目した一連の研究の一部です。これまでの研究で「1つのグ

ループが様々な課題で成果を示す度合いであり、将来の異なる課題でも、そのパフォーマンスを予測できるもの」として集団的知能が想定できること、また、集団的知能は、個人の知能よりも、メンバーの社会的感受性 (social sensitivity) の平均値によって最も予測されることが報告されてきました。これは、集団の「力」を説明する、とても魅力的な現象に見えましたが、介入可能性の観点から考えても、その「力」が発揮される詳細なプロセスの特定が求められていました。

本実験では、写真のように（実際は、赤ちゃんもいませんし、親しい関係ではありませんでしたが・・・）、3人でブロックを積み上げるというこれまでと異なる課題（身体活動を伴う課題）を用いて検討しました。その結果、社会的感受性とパフォーマンスの関係は、これまでと逆の傾向（負の傾向）が見られました。このことから、社会的感受性がパフォーマンスと関連するのは、課題における言語の優位性が関わるのではないかという仮説を提案し、考察としました。

なお、本実験は、2014年度南山大学人文学部心理人間学科卒業生の和田真波氏との共同研究の一部でもあります。特に、分析に用いたデータに関しましては、彼女の多大な労力のおかげで収集が実現しました。

受賞をできて嬉しかったのは、これが大学院を修了した後に始めた研究であるということです。研究者の独り立ちの気配をお見せできたことで、ご心配をおかけしてきた大学院時代の指導教員である吉田俊和先生（本原稿〆切の12/1がお誕生日でした）に少しばかりは

安堵していただけるのかなと思っております。今後も、本賞を励みに、粛々と研究を進めて行ければと思います。ありがとうございました。（執筆：土屋耕治）

★★★ 三隅賞 ★★★

選考委員長 中島健一郎（広島大学）

三隅賞受賞者が決定しました。

今回の選考では、2013, 2014 年に刊行された「Asian Journal of Social Psychology」Vol.16, Issue1-4, Vol.17, Issue1-4 からそれぞれ各年につき選考が行われました。選考委員会はアジア社会心理学会から 2 名、本学会から 3 名の委員からなり、審議の結果、総会でお知らせいたしました通り、以下の論文への授与が決定いたしました。おめでとうございます。

Hashimoto, H., & Yamagishi, T. (2013). Two faces of interdependence: Harmony seeking and rejection avoidance. *Asian Journal of Social Psychology*, 16(2), 142-151.

Kim, Y. H., Chiu, C. Y., Cho, S., Au, E. W., & Kwak, S. N. (2014). Aligning inside and outside perspectives of the self: A cross-cultural difference in self-perception. *Asian Journal of Social Psychology*, 17(1), 44-51.

なお、賞状ならびに賞金 1,000 ドルの授与式は、本年 8 月に開催された第 11 回アジア社会心理学会大会の場で行われました。

★★★ 国際学会大会参加記 ★★★

2015 年度のアジア社会心理学会発表支援制度に基づいて渡航費補助の得られた 2 名の先生方に、アジア社会心理学会第 11 回大会の参加記を執筆いただきました。なお、この参加記は、「実験社会心理学研究」Vol. 55(2015), No. 1 に掲載された報告文を、2 名の著者に許可を得た上で、広報を目的として転載させて頂いております。

⊗ 伊藤建彦（東京大学大学院人文社会系研究科）

この度は、2015 年度アジア社会心理学会発表支援制度に採択していただき、誠にありがとうございます。2015 年の 8 月 19 日から 22 日までフィリピンのセブ島にて開催されたアジア社会心理学会第 11 回大会に参加してまいりました。会場となった、ウォーターフロントホテルは、私が宿泊したホテルでもあり、学会中のほとんどをホテル内で過ごしました。

さて、学会会場では、フィリピンの心理学会との共同開催であったため、フィリピンの方々が多かったのですが、他の国の方々もたくさん参加しておられました。私は、ポスターセッションでの発表でしたが、香港、中国、韓国、インドなど、各国の方々に見に来てくださり、異文化を超えた学術交流ができました。特に、それぞれの国において私の研究がどういった位置づけとなるのかについて、熱心にアドバイスをいただけたことがとても嬉しかったです。日本において研究している私ですが、自分が行っている研究がいずれ海外でも発展していくのではないかと思います、胸が熱くなったことを覚えています。



私の関心の対象は、偏見と原因帰属の関係です。現在、就職活動において他大学が有利な状況が不採用時の自己奉仕的帰属バイアスに与える影響を検討しております。特に今回の学会では、内的要因への原因帰属として、自己の能力や努力への帰属、外的要因への原因帰属として、他大学を優遇している企業への帰属に注目しました。実験の結果として、自己奉仕的帰属バイアスの知見と整合し、他大学が有利な状況において、不採用時の自己への原因帰属が抑制され、企業への原因帰属が生起していました。今後は、こうした状況における自己奉仕的帰属バイアスの心理的メカニズムとして、状況への不公平認知を取り上げて検討していきたいと考えています。

末筆ではございますが、今回貴重な経験をさせていただいた日本グループ・ダイナミックス学会に心より御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

☉ 正木郁太郎（東京大学大学院人文社会系研究科）

このたび日本グループ・ダイナミックス学会からのご支援をいただき、2015年8月にフィリピン・セブ島でのアジア社会心理学会に参加させていただきました。

私事ではございますが、今回の学会は、遅まきながら初の国際学会・初の英語での海外発表、そして成人してから初の海外旅行と、初めての連続となる機会でした。そのため、往路の飛行機から心配しきりで臨んでいたことを今でも強く覚えています。さらにはセブ島の空港に到着した際、早速同行者の大学院生とはぐれてしまって冷や汗をかくなど、幸先の悪いスタートを切ってしまいました。

しかし、いざ参加・発表をしてみると、興味深い点が複数あり、非常によい勉強になったと感じています。

様々な国の研究者の方とお話をさせていただいたことには、いくつかの大きな収穫がありました。第一に、自分が意識的・非意識的に依拠していた、「日本に固有の課題意識」を

振り返ることが出来ました。私の今回の発表は、企業組織でのダイバーシティに関する研究でした。具体的には、職場の女性比率の向上という多様化が従業員心理に与える影響、そしてそこに介在する組織風土の重要性について考察しました。元々この研究は、昨今日本で話題になっている「女性活躍」の問題が課題意識の発端となったものです。当日の質疑の中でも、この研究の背後にある日本的な背景に関するご質問を多くいただき、そもそも日本の企業社会がどのような状態にあるか、なぜ組織風土が問題になりうるか、等々、慣れない英語ながら議論をさせていただきました。これらの中には、日本の研究者であれば（ほぼ）当たり前前に共有している内容も数多く、どこまでが日本に固有の課題で、どこからが国際的に共有される課題か、改めて考えることが出来ました。

第二に、肌感覚ではありますが、国によって研究潮流に違いがあるように感じ、大変興味深く思いました。例えば、私の発表に足を運んでいただいた方は、中国系の研究者の方が多くいらっしゃいました。さらにいえば、国内学会以上に、企業組織の研究に関心をお持ちの方が多かった印象です。少ないサンプルではありますが、昨今の経済発展などを鑑みると、中国ではこうした課題意識が強いのかもし



れません（たまたま、という可能性も大きいですが……）。また、日本の研究者の方々の研究手法が、他のアジア圏の方々に比して思いのほかしっかりしている点にも驚きました（分析方法、実験・調査の組み方の一貫性、など）。これまで当たり前のように受けさせていた教育の水準がいかに高いものだったか、思い知らされた次第です。

これらに限らず、今回の学会参加では非常に多くの学習や、今後の学習の「種」をいただきました。まだまだ若輩の身ではありますが、今後の成長の糧とし、研究に一層邁進しようという固い決意をする大きなきっかけとなりました。最後に、大会参加にあたってご支援を賜りました日本グループ・ダイナミックス学会のみなさま、審査いただいた先生方など、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。この度はご支援をいただき、まことにありがとうございました。

 ★★★ 追悼文 ★★★

廣田君美先生の追悼文

西田公昭（立正大学心理学部）

恩師の追悼文を書くことになったのだけれども、どんな方がこれを読んでもくれるのか、多少気になる。なぜなら、若い学会諸兄は恩師のことを全く知らないからだ。確かに私に近い年齢から上の方は、あの強烈なキャラクターの片鱗をご記憶の方は少なくないだろう。

学会の大会では、発表会場やらシンポジウムで最前列に陣取り、ハラハラドキドキの歯に衣着せぬコメントをする。そして恒例のように懇親会の二次会を企画させ、さまざまな大学から大勢の諸兄を集めて、みんな“弟子”にしてしまった。「同席させられたら、弟子と呼ばれるかバカと呼ばれるかだよな」と悪びれていう先輩弟子もいた。そんなだったから、そこそこの熟年の諸兄には印象も強く、「あの名物先生が逝去されたのか」と時の流れを懐かしんでくださるだろう。しかし、そんな豪傑ぶりも今は昔のことになり、やがて記憶も消えるのである…。

さて、ここまで読んでくれた若い諸兄に、恩師の何か価値あるものを伝え残せないかと思う。しかし、実は私としては、この短い紙面で、廣田先生の何を…、と思ってしまう。何を語ろう…。いろいろある…。

そういえば、「バカもん、質問紙の丸で何がわかる！」とよく言われた。“質問紙上の認知反応なんか社会現象を説明するのに信用ならん”という姿勢であった。当時はそう言われても、あまり気にもせずにいたが、今は痛いほどわかる忠告であり、繰り返し聞かされた Lewin, K. の精神こそ大事にしていたのだった。だが我々のような第2世代は、それをしっかりと受け継いだとは言いがたく、第3世代を前に、説明に難しくなりがちな Lewin の研究アプローチを、身をもって教えることなく済ませていることが多い気がする。これは反省するに価すると思う。つまり、もっとダイナミックな研究をしろ、ということ。

恩師は、40歳になる前には「集団心理学」（誠信書房）をまとめ終え、自ら実証データを集めて論文を書くなどという一般的な社会心理学者のやるようなことには関心がなかった。ということは、50歳を遠に越えてまで実証研究を繰り返している自分の方が立派に頑張っているというかもしれない。しかし、その意見は正しそうでもちょっと違うと思うのである。「バカもん、破門じゃ」としょっちゅう飛んでくる台詞の背景を考えることで、自分のやっている研究が、実社会やアカデミックな社会にどれだけ意味のあることなのかと考えさせられ、質問紙上のみの現実というアーティファクトな研究になりがちな自分を生身の現実へと引き戻してくれた。「諸君、すべての科学はだなあ、人間が長生きしたいか、あるいは限りある人生の質を高めるかという問題に立ちむかっているのだ、社会心理学もそれだぞ」と。こんな話を聞きながら、私はカッコイイ流行りの研究やら、最先端な分析法を駆使することを自慢するよりも、今社会が抱えている問題の解決を導き、後に社会が抱えるかもしれない類似の現象へと応用できる理論の構築こそが大切なのだと思うようになった。

実は、私は直系の弟子ではない。学部時代もマスター時代もゼミでは恩師を選ばなかった。なんとなくであるが当時は、直系の弟子になると、先生のパワーに負けて自己喪失していくように見えて、あまりに近づかない選択をしたのだった。しかし、その後だんだんとその魅

力に引き込まれ、ドクター課程では望んで所属させていただき、「弟子との付き合いは一生だぞ」と言ってくださって、PDを二年してからようやく就職、結婚仲人、国際学会への同行、学位論文、節目の記念パーティへの招待などの厚情を受け続けてきた。その頃から、ご病気になられる数年前まで、たいした用もないのに「何しとる、元気か?」と突然に電話がかかってくることも少なくなかった。豪快な恩師のそんな"淋しがり屋"の側面も一門にはよく知られていたと思う。

さて、恩師訃報の第一報を私が受けたのは、遠方の講演に出向く途中であった。正直なところ恥ずかしながら、ひとり電車の中で涙があふれてとまらず、感謝や寂しさの気持ちでいっぱいになった。自分の人生において、社会心理学者として高くプライドを保つにあたり、恩師はかけがえのない存在であったのはまぎれもない。「学ぶとは心に誠実を刻むことであり、教えるとは共に希望を語ることである」という恩師からいただいた精神を座右の銘としながら、恩師の命をずっと継いでいきたいと思うのである。

★★★ 事務局からのお知らせ ★★★

【 研究の国際化支援制度（英文校閲補助）について 】

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際に英文校閲代金の一部を補助するものです。年齢制限などありませんので、奮ってご応募ください。詳細は学会ホームページをご参照下さい。

(学会 HP: http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html)

【 実験社会心理学研究 掲載予定論文（2015年11月30日現在 受理） 】

■ 2015年度 55巻1号（11月中発送予定）

原著論文

堀江尚子・渥美公秀・水内俊雄

ホームレス支援の関係性の継続と崩壊—入所施設のアフターケアでのアクションリサーチおよび支援関係の理論的考究—

山田順子・鬼頭美江・結城雅樹

友人・恋愛関係における関係流動性と親密性—日加比較による検討—

織田 涼・服部雅史・八木保樹

他者の行動予測における検索容易性の間接的影響：特性についての期待の影響からの検討

資料論文

松尾 藍・吉田富二雄

性ステレオタイプが人物の否定的印象を緩和する効果

鈴木公啓

体型印象管理予期と他者の親密度および性別—痩身を望む若年女性において—

宮崎弦太

関係相手の応答性に応じた共同規範の調節—愛着不安による調整効果—

早期公開分

上記全ての論文が早期公開済みで、55巻1号発行時の早期公開予定なし

■ 2015年度 55巻2号（3月中発送予定）

※現時点では、次号を特集号とするのか、通常号とするのかは未定ですが、掲載が決定している論文は以下の通りです。

原著論文

秋保亮太・縄田健悟・中里陽子・菊地梓・長池和代・山口裕幸

メンタルモデルを共有しているチームは対話せずとも成果を挙げる：共有メンタルモデルとチーム・ダイアログがチーム・パフォーマンスへ及ぼす効果

特集：身体性の実験社会心理学

沼崎誠・松崎圭佑・植田健司

持つものの柔らかさ・硬さによって生じる皮膚感覚が対人認知と自己認知に及ぼす効果

神林憲司・田戸岡好香・石井国雄・村田光二

白色または黒色の着衣が道徳性の自己認知に及ぼす影響

特集：グループ・ダイナミックスの〈時間〉

宮本 匠

現代社会のアクションリサーチにおける時間論的態度の問題

矢守克也

アクションリサーチの〈時間〉

☆早期公開済み論文は下記サイトで閲覧できます。

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjesp/advpub/0/_contents/-char/ja/

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjesp/-char/ja/>（学会誌トップページ）

【 次年度大会について 】

2016年度大会は、山口裕幸委員長のもと、九州大学にて10月9日（日）、10日（月・体育の日）の予定で開催されます。多くの会員の方の参加をお待ちしております。

★★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記を

ご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷（株）学会フォーラム内
電話：075-415-3661
FAX：075-415-3662
E-mail：jgda@nacos.com

学会運営・对外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒463-8521 名古屋市守山区大森 2-1723
金城学院大学 人間科学部 多元心理学科 北折充隆研究室
電話：052-798-0180(代表)
E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連

【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷（株）営業部編集校正課内
電話：075-441-3155
FAX：075-417-2050
E-mail：jiesp-hen@groupdynamics.gr.jp

【編集委員長】

今川民雄
〒004-8631 北海道札幌市厚別区大谷地西 2-3-1 北星学園大学社会福祉学部
E-mail：imagawa@hokusei.ac.jp

広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿，メールマガジンへのニュース記事投稿，新刊案内や研究会案内等のニュース記事，書評，公募情報など】

〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町 1-1
福岡教育大学教育学部 幼児教育講座 植村善太郎
E-mail：office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

また，マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も，同アドレスまでお送りください。

【編集後記】 皆様のご協力のお陰で，年内に本号を発行することができました。本当にありがとうございました。ところで，今年は気候だけでなく国内外で大きな状況の変化が生じ，世の“無常”を実感させられた一年でした。毎日バタバタと反省もなく過ごしていますが（私だけ!?!），年末くらいは一年の出来事を振り返り，新年に向けた心の準備をしたいと考えております。どうぞよいお年を。（編集子）